

女兒は非妊時やせが，男児は妊娠中体重増加不良がSmall-for-gestational-ageの発症リスク因子になる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会事務局 公開日: 2019-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 春日, 義史, 重見, 大介, 鈴木, 毅, 金, 善恵, 樋口, 隆幸, 康永, 秀生, 中田, さくら メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003609

優秀演題候補セッション

女児は非妊時やせが、男児は妊娠中体重増加不良が Small-for-gestational-age の発症リスク因子になる

春日義史¹, 重見大介², 鈴木毅¹, 金善恵¹, 樋口隆幸¹, 康永秀生², 中田さくら¹

1. 川崎市立川崎病院産婦人科

2. 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学・経済学教室

【背景・目的】

母体の栄養状態が胎児成長に与える影響は性別ごとに異なるとされるが、やせ妊婦（非妊娠時 BMI<18.5kg/m²）における知見は少ない。本研究の目的は児の性別ごとに母体体格と small-for-gestational-age (SGA: 出生体重<10%tile) 発症との関連を検討することである。

【対象・方法】

対象は 2013 年から 2017 年末までに当院で周産期管理を行い、満期分娩したやせ妊婦 (n=566) と正常体格妊婦 (18.5kg/m² ≤ 非妊娠時 BMI < 25kg/m²; n=2671) である。多胎妊娠、胎児奇形、妊娠糖尿病および糖尿病合併妊娠、未受診などの妊娠週数不明例は対象から除外した。妊娠中体重増加量 (gestational weight gain: GWG) は Institute of Medicine の基準を用いて評価した。両群間の比較には Student t 検定やカイ二乗検定を用い、SGA 発症リスク因子を抽出するために多変量ロジスティック回帰分析を行い、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。なお、本研究は当院倫理委員会承認のもとで行った。

【結果】

やせ妊婦群は正常体格妊婦群と比較して、有意に SGA 発症率が高かった (12.2% vs 8.2%, $p < 0.01$)。ただし、児の性別で分類して検討すると、女児では正常体格妊婦群と比較して、やせ妊婦群で有意に SGA 発症率が高かったが (14.0% vs 8.0%, $p < 0.01$)、男児では両群間で同等であった (10.4% vs 8.4%, $p = 0.30$)。やせ妊婦群と正常体格妊婦群を合わせて児の性別ごとに SGA 発症リスク因子を検討したところ、女児では非妊時やせが SGA 発症リスクを上昇させたが (オッズ比 [OR]: 1.80, $p < 0.0001$)、GWG 不良は関連を認めなかった (OR: 1.38, $p = 0.11$)。一方で、男児では逆に非妊時やせは SGA 発症リスクを上昇させなかったものの (OR: 1.30, $p = 0.10$)、GWG 不良が SGA 発症リスクを上昇させた (OR: 1.53, $p = 0.03$)。

【結論】

やせ妊婦群は正常体格妊婦群と比較して、有意に SGA 発症率が高かった。児の性別で分類すると、女児では非妊時やせが SGA 発症リスク因子となるものの、男児では関連を認めず、やせ妊婦においても母体体格が児に与える影響は児の性別ごとに異なる可能性が示唆された。